Osaka University Knowledge Archive

Title	論文（中扉）
Author(s)	柿木, 伸之
Citation	形象. 2016, 1, p. 7-9
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/75781
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

論

文

形象を、他ならぬ形象として問う。これがベームの創唱する形象学の基本的な姿勢である。たしかに近代の美の概念は、形象の美として形成されてきた。しかし、形象がそれ自体として問われるようになるには、古典的な「模像」としての形象の自明性が崩れるのを待たなければならなかった。それ以後のモダン・アートは、形象とは何かという問いに芸術家が絶えず取り組み、作品をもって応答していくことによって展開している。三木による翻訳を収めたベームの「形象という問題」は、このような形象の消息を踏まえつつ、形象そのものを理論的に問う地平を切り開いた画期的な論文である。

ベームの論文において注目されるべきは、聖書の偶像禁止をめぐる物語を取り上げることで、形象を崇高の次元へ解き放つ道筋を示唆していることであろう。本号所収の各論文は、二十世紀以後の哲学者の形象論における、この偶像禁止を踏まえた仮象の批判などを検討することによって、形象の現出自体に伴う、崇高とも言える緊張に光を当てている。

高安論文は、偶像禁止をめぐる議論を、アドルノ美学における徹底的な仮象批判に結びつけながら、アドルノにおける形象としての作品の概念に迫る。柿木論文は、形象を媒体とするベンヤミンの思考が、同様に仮象批判を通過することによって、想起の場をなす「弁証法的形象」として形象を捉え返すに至る過程を辿る。原論文は、アドルノとベンヤミンの批判的な形象論が、シュヴェッペンホイザー父子によってどのように受け継がれているかを検討することによって、批判理論における形象論の展開に見通しを与えている。

渡邊論文は、リオタールの絵画論がメルロ＝ポンティの絵画論の批判を介して形成されたことを示しつつ、形象の現出に精神分析的な意味での「葛藤」が伴うというリオタールの洞察を浮き彫りにする。その議論は、彼が崇高の次元に着目する出発点にあるものを示唆していよう。

［柿木伸之］